

想的変節について触れている。この部分は、一九六六年に出た増補改訂版でも、同じ書き方になっている。

翌一九五七年には、佐々木守が「児童文学における近代性への疑問——児童文学者の戦争戦後責任——」「痛い、痛い、痛いばらのとげ——小川未明「野ばら」について——」で、未明をふくめた児童文学者たちの戦争への姿勢を批判しているし、上野瞭は、その佐々木の論を批判する形で「児童文学者の戦争戦後責任」への疑問」を書いて、佐々木とはまたちがう形で、児童文学者の戦争戦後責任について論じている。

これらの文章は、どれも『資料・戦後児童文学論集』（偕成社 一九八〇年）、『現代児童文学論集』（日本図書センター 二〇〇七年）に収録されているから、いまでも容易に読むことができる。

よく自身、もう十七年も前になるが、「日本児童文学批評史のためのスケッチ」（『児童文学批評・事始め』てらいんく 二〇〇二年十月収録）の中で、未明における童心の推移という形で、その転向のあり方について語っている。

よくがおどろいたのは、よくにとつて周知の事実であったものが、増井の論では、秘すべき恥部、長い間隠蔽されてきたものとして語られていることだった。

これは、児童文学にたずさわってきた者たちの弱さでは

ないかと、よくは思った。

よくらは、小川未明の転向の問題も、土家由岐雄『かわいそうなぞう』が空襲時期と動物虐殺との間でフェイクと言っているほどの事実齟齬があることなどを、もうずいぶんと前から、人にあきれられ、あきらまれるほどに語ってきたつもりであった。

しかし、『かわいそうなぞう』は、いまだに平和絵本として、ちまたに流布している。そして、今また、小川未明の転向について、意識的に隠蔽してきたかのように語られてしまっている。

これは、やはり、児童文学の弱さではないのか。しかし、弱さは弱さとして認めつつ、一つ一つの足跡を批評として作品として残していくことが大切にちがいない。その足跡の積み重ねが、フェイクとしての『かわいそうなぞう』に對峙し、その存在を危うくするかも知れない。いや、しないまでも、これ以上にひどくなるのを防げるかも知れない。そんな思いが、よくの中にはある。

だから、未明の転向も、よくにとつては鏡である。未明のほんとうの姿を映すことで、よく自身のこれからもまた問われ続けることになるだろう。

小川未明の転向問題を、秘すべき恥部で長い間隠蔽され続けてきたという捉え方は、事実には反するという意味で、ひとつのフェイクである。『かわいそうなぞう』をあげる